



阿犬 吠犬

作 倉垣 裕太
画 土井 瑛子

皆さんは何故、神社の入りに
狛犬がいるか知っていますか？
そう、一般的には神社に妖しげな
ものが入らないための見張りだと
言われています。でも本当はもう
一つ理由があるのをご存知でしょ
うか？ ……実は彼らは前世で罪
を犯した人間たちなんです。狛犬
として生まれ変わった罪人はまず、
神様にこう言われます。「徳を積ん
だら君たちを自由にしてあげよう」
と。彼らは狛犬としての仕事を全
うし魂の修行を終えて初めて、天
に昇ることができるのです。

昔尾道のある神社に二匹の狛犬がいました。

二匹はお互いに、口を開けたほうを阿犬、閉じたほうを吽犬と呼びあっていました。彼らは来る日も来る日も神社を守っては徳を積もうとしていました。しかし、せいぜい年に一度、こっそり金堂に近づこうとする泥棒に睨みを効かせるくらいが関の山。そんな彼らですら、仕事が暇なのになまかせていろんな話を合いました。

「なあ阿犬。お前は、生前何したんだ？」

「お袋に毒を盛った。吽犬は？」

「深い仲だった女を絞め殺した」

「次に生まれ変わったら何がしたい？」

「まずはとにかく、たらふくうまいモンが食いたいぜ」

「同感だ」

そんなある日、神社に一人の女の子がやってきました。おぼつかない足取りで、か弱い両手を何かを求めるように前に突き出して。そして、その顔は不思議なことに包帯ぐるぐる巻きにされていました。

「あれはなんだい」

「わかんねえ」



「神様、どうかわたしに目をください。鼻をください。耳をください」

女の子はそういうと顔の包帯をするりと取り払いました。その下にあったのはとてもひどい火傷でした。そのひどさたるや、目さえ満足に開けない様子です。

「神様、もしこの顔を、不憫にお思になるなら」

女の子は声を震わせながら一生懸命祈ります。

「わたしに、わたしに新しい顔をください。どうか、どうか」

阿犬はその様子が見ていられなくて目を背けました。しかし吠犬は真剣なまなざしで女の子を見つめ続けていました。

「なあ」

しばらくして、吠犬は女の子から視線を阿犬に向けながら言いました。

「この顔を、あの子にやることはできねえかな」「どういうことだ？」

阿犬は驚いて聞き返しました。

「だから、あの子の顔を、俺の顔と引き換えに治すことはできるのだろうか」と訊いてんだ」

「そりゃできるかも知れないが」阿犬は戸惑いながら言います。「どうしてそこまでするんだい？」

吠犬は少し黙った後、ぼつりと言いました。

「思い出すんだ、あいつを」

「あいつ？」

「昔の女だよ」

「お前が殺した女か？」

吠犬は悲しそうな顔をして語り始めました。

「あいつは、町一番の美人だった。器量よしで俺の誇りだった。でも、ある日俺の住んでいた町を大火事が襲った。それはそれはひどい火事で、町民の三分の一が焼け死ぬほどの大火事だった。あいつは、幸いにも助かった。けれど……それは輝くばかりに美しかった顔と引き換えだった。あいつの顔はひどい火傷を負っちゃまったんだ。それでも、俺はあいつに惚れていた。けど、ある日あいつは言ったんだ。死にたいって。もう満足に開かない瞳から涙を流して言ったんだ。だから俺は」

吠犬は涙を堪えるように言葉を切った。

「確かに俺の犯した罪は重い。償いたかった。でももう昔のあいつは助けられない。だからせめてこの子を救いてえんだよ」

「……そうか」

少しの間、二匹の間に沈黙が流れました。ほどなくして口を開いたのは阿犬でした。

「なあ、考えなおさないか」

「え？」



阿犬はゆっくりと語り始めました。

「俺もお前と同じなんだ。大切な人の支えになれなかった」

「どういうことだよ？」

「俺のお袋、歳でさ、頭がおかしくなっていたんだ。毎日毎日ポーツとしてさ。時々、知らない人が襲ってくる、って暴れて……。俺は、前みたいに優しいお袋に戻ってもらいたくていろいろな話をしたよ。でも、お袋は何も聞いてくれないんだ。俺がどんなに気持ち悪く、心を届けようとしても受け取ってすらくれない。だからいつそこの手で、って思ってしまった」

黙りこむ叫犬に阿犬はたみかけました。

「もしお前が顔をあの子にやったら、どうなる。お前は目を失う。もうきれいな夕焼けも見えない。鼻を失う。もう四季の花の香りもかけない。耳を失う。もう、俺の声は、届かない」

阿犬はさすがのように言いました。

「俺は、お前と話するのが楽しい。俺は、もっとお前と話していたいんだよ……」



今度はとても長い沈黙でした。静かな境内には女の子の必死の祈願の音が小さく響き続けていました。そして吠犬は微かな声で、しかしはつきりと言いました。

「ごめん。阿犬」

その瞬間、吠犬の顔に光が灯り、ピキピキとひびが入り始めました。

「吠犬！」

叫ぶ阿犬に吠犬は言いました。

「もうお前とは喋れなくなる。お前を見ることもできなくなるし、お前の声も聞けなくなる。でも俺はここに居る。これからも一緒に徳を積んでいこうぜ」

「頼む吠犬！ 怖いんだ！ もうあの孤独には帰りたくないんだ。俺を一人にしないでくれ！」

「もしかするとお前の修行はこれなのかもな」

「そんなの勝手だ！」

「……本当にごめんな、阿犬」

吠犬は一つ遠吠えをしました。それを合図

に吠犬の顔はバラバラと崩れ、そのかけらは雨のように地面に降り注ぎました。そして女の子の「見える！」という声が境内に響き渡りました。

これが、私の知っている、良神社の、片方だけ顔が壊れている狛犬のお話です。